

「おかえりモネ」と「晴天を衝け」に （メルマガ 2021年11月号）

メルマガ読者の皆様は、テレビドラマはご覧になるでしょうか。NHKの朝の連続テレビ小説「おかえりモネ」は10月29日が最終話となりました。私は毎日視聴できたわけではありませんが、週末や休みの日などに見ることがありました。

物語の前半では、気仙沼出身の主人公、永浦百音が、東日本大震災からの苦悩や葛藤を抱え、将来は人の役に立ちたいと考えます。やがて天気予報に魅力と可能性を感じ、気象予報士を目指し、試験に合格するのですが、いよいよ東京へ旅立つ際の言葉が心に残ります。

「気象はね、未来が分かるんだよ。未来が予測できるってことは、誰かが危ない目に遭うことを止められるかもしれないってこと…。この仕事で誰かを守ることができるなら、私は全力でやってみたい。」 この百音の言葉にあるように、今更ながら「人のために役立ちたい」という気持ちは尊いと思いますし、ドラマですが若者の純粋な気持ちに惹かれます。

「人の役に立ちたい！」 そのことを考えてみると、現在放映中の大河ドラマ「晴天を衝け」の渋沢栄一の生き方と重なる思いがしました。渋沢栄一の著書『論語と算盤』（ちくま新書）、『富と幸せを生む知恵』（実業之日本社）を読んでもみると、全体を通じて、渋沢が論語に基づいた生き方を軸として、事業を展開していることが分かります。

まず渋沢は、「論語では富や地位を得ることは否定的に描かれている」とするそれまでの論語の解釈に反論して、「孔子は『論語』において道理をもって得た富貴でなければむしろ貧賤の方がよい。もし正しい道理を踏んで得た富貴ならば、少しも差し支えないと説いている。」と述べます。その上で、実業家として肝に銘じるべき四つのことの一つに、「個人の利益になると共に、国家社会の利益にもなる事業かどうかを知ること」とあります。個人の利益ばかり追求していれば一時的には繁盛するが、社会に見捨てられて、いずれは没落してしまうと述べています。もちろん社会公益のためなら個人の利益は犠牲にしてよいということではなく、収支の合わない個人企業は決して成立しないとも述べています。

渋沢は、自己の利益を追求するのではなく、あくまで国を富ませ、人々を幸せにすることを大事な目的として、財閥を形成せず、数々の事業を育成しており、また多くの人材を育てています。こうしたことが「日本の近代資本主義の父」と呼ばれる所以であると感じます。

さて、改めて職業を考えると、職業は自らの生活を支える手段ですが、単に収入を得るためだけではなく、自己実現、社会参加・社会貢献などの機会であり、そしてそれに伴う喜び、達成感、充実感、使命感などを感得するといった多様な要素があると思います。

今日、様々な職業が生まれていますが、いずれも直接的、間接的を問わず、人の役に立つものですし、企業のCSR活動も盛んになっています。滅私奉公ではなく、自己実現と社会貢献を両立させながら生きることによって価値が認められる時代なのでしょう。コロナ禍にあって、「人のために役立つ生き方」の尊さ、ありがたさを感じることも増えたように思います。

渋沢栄一の肖像が描かれた新一万円札は、2024年の発行予定ですが、新札を見ながら渋沢の生き方を思い返すこともあるかと、発行を今から楽しみにしています。(N.W)